

私の亡き母へ

李 節子

東京女子医科大学看護短期大学

突然の死

昨年6月に、最愛の母が67歳で他界した。脳溢血による突然の死であった。働き者の母は、その日まで魚加工場で仕事をしていた。家で孫と遊び、近くの友人が来ていた夕刻である。「何かすごく頭が痛いんだけど、私はこのまま死ぬかも知れない……」と言った。友人が「なにバカなことを言っているの」と言いながら肩をもんであげていた。そのまま倒れて、意識を失い、生命を閉じた。幼い孫は母が亡くなったのも知らずに、母のからだに寄り添って遊んでいたそうである。最後の母のことばは「こどもがまだごはんたべていないから……」であった。

大阪の実家から母の死亡を、電話で知らされた。私は35歳になるが、母が亡くなって、はじめて「臍帯」が切断されたような気がしている。子宮の中は胎児にとって安心できる心地よい世界だと聞けるが、母がこの世に存在している限りは、何も恐れることのない、子宮の中にいるような気がしていた。突然の「切断」に、どうして生きていけばいいのか、行き場の無い、喪失した自分を感じた。

今もまだ時おり波のように悲しみが押し寄せてくる。

母のひと

母は人に尽くして、尽くして、尽くし抜いて生きてきたひとである。人には誰にでも欠点があるが、私の母の欠点は、あまりにも自分に尽くさず、ひとに尽くしたことである。また、「誰にも迷惑をかけない」と1人で頑張ったことだ。死ぬ時も、誰にも迷惑をかけず、アッと言う間に亡くなってし

まった。

長女として生まれた母は、実母が癌で亡くなるまで看病をし、まだ幼かった兄弟たちを母親がわりとして面倒をみて育てた。父と結婚してからは、夫とその両親、子どもに全力で尽くしてきた。「身を粉にして働く」という言葉があるが、私の母はまさしくそのとおりであった。そのため、家族は「母」という大海にどっぷりとつかって、生きてきた。人に甘えることのなかった母は、「疲れた」とはめったに口にせず、痛みはぎりぎりまで堪えた。母が痛みを伝えるときには、父や私たち子どもは、「これは、相当に痛いものにちがいない」と緊張したものである。

母はまた、「嘘」をつかない人である。いや「飾る」ことのできない人であった。素朴な、飾らない、あるがままの人だった。

父と母がよくケンカをしていた時代があった。なぜ一緒に暮らすのか、別れたらいいのにと憤っていたある日、父がほろよい気分で帰ってきて、子どもを集めて説教をし始めた。とにかく「おまえたちのお母さんはな、天使のような人だぞ、大事にせなあかんぞ」と言いたかったらしい。日頃の悪態を見ていただけに、私はそんな父と母に妙に感動した。

母の「母性」性

母は結婚してすぐに、続けて4人の年子を産み、42歳で一番下の弟を産んだ。一番下の弟が生まれた時に私は10歳であったが、母が妊娠していることをまったく知らなかった。朝、目覚めると父と母が急にいなくなって、子どもたちみんな泣いていると、父が嬉しそうに叫びながら「男の子や」



と喜んで帰ってきた。すぐさま、みんなで近所の助産院に駆けつけると、可愛い弟がベッドですやすやと眠っていた。この世にこんなきれいなものがあるものと感心した。今でもその情景は目に焼きついている。ことばにはならない幸せな時である。このことが、私が助産婦となったきっかけかもしれない。

母は妊娠中にも出産のその日も何くわぬ顔をして生活をし、家業である仕事に精を出し、家事をしていた。お産の後母が休んでいたという記憶がない。今、考えるとすごいことである。とてもできないことである。

私の記憶が明確になる以前の、幼い頃の思い出は、安心感をよびおこすような「食」である。いわゆる離乳食が原体験となっている。母からの「口うつし」の暖かい食べ物物の快感が、対人関係の基本となっているような気がする。

大きくなってからは、とにかく食べ物が常に家のなかに沢山あった。ごはんは決してなくなることがなかった。次から次へと炊いていたのである。食べざかりの子どもたちにもあり余る程であった。それがいかにすごいことかは、最近になって自分が仕事をしながら家庭を持ってみてわかったことである。

また母は妙に、寝具にこだわった。「この布団は暖かいで、いいやろ」と言っでは気に入った布団があれば次々と買ってきていた。「寝るときは寒かったらあかんから」と、あまりに布団を大事にするので、ある日フト「おかあちゃんは、布団がなくて苦労したことがあるのとかがうか」と聞いてみた

ころ、何もいわずに笑っていた。きっとそうに違うと思っている。

母は、深夜かならず2回、子どもたちを見回りにきた。はみ出した身体に布団を掛けなおしていたのである。母の静かな足音と衣ずれの音は、絶対的な夜の安心を与えてくれた。

母が育てる植物は、みるみるうちに大きくなっていった。母はいのちを育てる基本がなんであるかを知っていたのかもしれない。「母性」性はいのちを尊び、守り、育てるものである。私の母はあふれるばかりの「母性」性を持っていた。

母からのアドバイス

助産婦をしている時にはいつも、「子どもを産むときには、本当に苦しいから、痛いから、優しくしてあげや」と言っていた。教員になってからは、「学生さんは、よくわからないいんだから、怒ったらあかんよ」と言った。まさしく的確なアドバイスである。嘘のない、あたりまえの素朴なことばだけに、こころに染みて残ってくる。

母のように強くはなれないけれど、母から学んだ生き物としての基本と、できる限り嘘偽りのない人間でいたいと思っている。そして、この世に私を生んでくれた母に感謝したいと思う。

* * *

森明子さんからご紹介をしていただき、亡き母のことを書くことができ、感謝しています。次は、心豊かで骨のある私の友人、高橋富士子さんにリレーをしたいと思います。